

カラカス日本人学校における校外での活動の在り方

前カラカス日本人学校 教諭

茨城県稲敷郡河内町立生板小学校 教諭 池田 浩

キーワード：教育課程，特別活動，校外学習

1. はじめに

ベネズエラ・ボリバル共和国は南米大陸の北部に位置し、北はカリブ海に面し、東はガイアナ、南はブラジル、西はコロンビアと国境を接している。国土の広さは日本の約2.4倍で人口は約2,800万人である。首都カラカスは、カリブ海から直線距離で約15kmの所にあり、ベネズエラ北部の東西ほぼ中央部に位置している。気候は、一般に雨季（4～10月）と乾季（11～3月）に分かれており、年間平均気温は20～25℃で、湿度が低いので年間を通して過ごしやすい。

しかし、治安については多くの問題を抱えており、政情は不安定である。1999年2月にウーゴ・チャベス政権が誕生したが、治安の変化はなく、窃盗、強盗、殺人事件、交通事故などが頻繁に起きている。銃による事件も多い。日本人が多く住む住居の外壁には電流が流れ、戸口には二重三重の施錠がなされている。現在、外務省からはカラカス首都区に注意喚起が発令されており、「渡航の是非を検討してください」という勧告がされている。また、物価についてもインフレが年々進んでおり、価格が高騰している。08年度の物価上昇率は約31%であった。物品の購入に対しては12%の税金がかかる。さらに、レストランなどでのサービスに対しては10%の付加価値税がかかる。

カラカス日本人学校の教育活動もこれらの治安の問題に大きく影響を受けており、修学旅行をはじめ、校外学習や現地校との交流なども安全面に大きく左右され、実施計画を立てることが大変難しい状況であった。しかし、大使館との連携を密にし、協力や情報を得ることで、許可を得ながら実践に取り組むことができた。以下にその概要を紹介したい。

2. カラカス日本人学校の児童生徒の実態

平成25年度は、小学部2年生から中学部2年生までが在籍していた。治安の影響もあってか、ここ数年は年を追うごとに減少している。しかし、児童生徒数が少ないため、全員が仲良く、上級生が下級生を引っ張る意識が強い。

治安に不安を残す地域のため、日本のように自由に友達と行き来したり、放課後学校で共に遊んだりということもできないのが現状であり、さまざまな制限をされた中で生活している。そのような生活において、ベネズエラに対してよいイメージを持っていない児童生徒も少なくない。

そこで、カラカス日本人学校において、現地理解を体験的に深める活動の一つとして、校外学習を計画し、様々な人とのふれ合いを通して、ベネズエラやベネズエラ人への理解を深められると考えた。また、ふれあいを通じてベネズエラのよさを伝えられる取り組みになると考えた。

3. 活動の実際

南米ベネズエラの首都にあたるカラカスは治安上不安が残る地域であり、現地人も含めて安全に対する意識が高い。住居についても堅牢な塀で囲まれていたり、高層集合住宅では入り口に警備員が目光らせていたりする。そのような国で生活する日本人家族は、日本にいる時と同じ感覚では外出がままならず、大変不自由な生活を強いられるようになる。カラカス日本人学校に在籍している児童生徒についても同様で、普段は住居と学校の往復の際に目にするものがカラカスの風景のほとんどとなっている。事情は様々であろうが、海外の地に滞在し、そ

ここで学んでいる児童生徒にベネズエラの自然・文化・生活の良さをたくさん知ることができるような活動を企画した。

(1) 1年目（平成24年度）

①学習場所の選定

校外学習において最も重要なことは安全である。大使館からの情報をはじめ、様々な方に様子を聞き、最終的に下見を行って目的地を決定する。1年目は大使館の協力で、チャカオ警察署の見学とエステ公園内散策を行った。場所を選定する上で次に重要なことは、児童生徒にとってベネズエラを学習する場となるか、日頃簡単に行くことのできない場であるかだ。そういった点で、校外学習がうまく行くかどうかは場所の選定にかかっている。

②活動の様子

校長車を先頭、警備車を後方に、スクールバス2台に児童生徒、保護者を乗せ、チャカオ市中心にあるチャカオ警察に向かう。警察署では広報担当の職員に案内され警察署内部の見学、自転車警ら隊及び警察犬によるパトロールのデモンストレーションを披露していただく。日本においても警察署見学は出来るが、異国の地においてどのように治安が維持されているかを直接感じ取ることが出来た。また、カラカスの治安状況についての話では聞き及んでいたが、実際データをもとに説明を受けることで自分の住んでいる地域の治安状況について真剣に考える機会となった。自転車警ら隊と警察犬のデモンストレーションも普段はなかなか見られないものであったため、子どもたち、保護者共に新鮮な驚きと感動を覚えているようであった。警察署見学の最後は署長さんや警察官たちとの記念撮影、警察車両見学を行い午前中の活動を終えた。

警察署見学の後は、大使館前のファーストフード店で昼食をとり、午後の活動場所であるエステ公園に向かった。エステ公園はチャカオ市南部に周囲2kmもある大きな公園で、中にプラネタリウム、鳥類館、爬虫類館、図書館、そして独立当時の船舶をかたどった資料館等がある。居住区からほど近い場所にあり、多くの現地住民の憩いの場となっている。しかし、なかなか児童生徒が気軽に出かけるということは出来ないため、今回は散策として、公園内を巡り、施設見学を行った。参加者は、ベネズエラの様々な鳥類や爬虫類等の施設を歓喜をあげて見学していた。

③活動を終えて

チャカオ警察署見学によって、こちらの国の警察官が高い意識を持って仕事を行っていることが子どもたちや保護者にも実感でき、これまであったカラカスへの印象が変わったようであった。お土産としてもらった帽子を喜んでかぶっている姿がよく見られる。また、普段、通りで見かける警察官に安心感を覚えるようになったと思う。

エステ公園は日頃中に入る機会があまりなかったので、様々な施設に感動し記念撮影を行う姿が見られた。児童生徒からは、「また、来てみたい。」「今度はプラネタリウムも見てみたい。」等の意見が出ていた。今回、居住区の近くの施設を見学したが、自分の住んでいる地域を知るのに良い機会となった。

(2) 2年目（平成25年度）

①学習場所の選定

2年目は、ロスナランホス消防署見学とバルータ市内のベネズエラ料理レストランでの現地料理体験、そしてボーリング場での親子ボーリング大会を行った。

②活動の流れ

スクールバスに児童生徒及び保護者を乗せ、ロスナランホス消防署に最初に向かった。消防署では署員の案内により消防署内部の見学、救急救命の様子をモデルを使って実演、そして消防隊の訓練の様子を間近で見させてもらった。その後、消防車や消火活動に使う道具の説明を詳しく聞かせてもらった。児童生徒、保護者共

に現地の消防署員が高い志をもって仕事に就いていることを実感できた。日本においても消防署見学はできるが、異国の地においてどのように火事から市民を守っているのかを直接ベネズエラの人と関わりから感じ取ることができた。特に消防隊長の号令により一糸乱れず整列する訓練の様子は迫力があり、児童生徒は目を食い入るようにその様子を見学していた。消防署見学の最後は消防署の方々と一緒に記念撮影を行い、午前中の活動を終えた。消防署見学の後は、バルータ市内のベネズエラ料理レストラン「サラマンドラ」で現地の人たちが好んで食べている鶏の丸焼きを食べた。初めて食べたという児童生徒はいなかったが、普段行くことのない地域のレストランの料理をおいしそうに食べていた。児童生徒からは「また来てみたい。」等の言葉が聞かれた。昼食後、午後の活動場所であるボーリング場に向かった。ベネズエラでは治安の悪化に伴い、休日であっても外出先で体を動かして遊ぶ場が限られている。そこで、親子で日頃のストレス発散も兼ねて、親子ボーリング大会を行った。児童生徒はもちろんのこと保護者も大変楽しむことができた時間になった。



ロスナランホス消防署にて

4. 考察

校外学習での場所設定は、過去の校外学習の反省であったように移動の時間が長く、車酔いをしてしまう児童がでてしまったことから、できるだけ移動を短くできないかということがきっかけで始まった。1年目は邦人居住区のチャカオ市内のチャカオ警察署見学・エステ公園散策も同様である。2年目は、チャカオ市と隣接するバルータ市内に校外学習の場をうつした。できるだけ普段の生活で行くことのない場所に見学に行くことで、この国のことを多く知ってもらいたい。この学習を通して、国際理解への素地を養い、意識を高めることが出来ると思う。これらの活動を通して、児童生徒はベネズエラの良さにより目を向け、ベネズエラ人に対して自然な態度で接するようになった。成長段階にある児童生徒にはいろいろな人との関わりの中で、様々な価値観に触れてほしいと願っている。学校外での活動が制約されるカラカス日本人学校ではあるが、今後の学習活動でも可能な限り、いろいろな人との関わる機会をもっていきたいと考えている。これらの活動を通して、本校の5つの教育目標である「考える子」「思いやりのある子」「進んでやりぬく子」「強くたくましい子」「日本もベネズエラもよく知る子」を目指し、平成25年度はさらなる新しい取り組みを増やしながら教育実践を行ってきた。児童生徒は1つ1つの活動に真剣にかつ全力で取り組み、研修テーマにあるベネズエラ人との交流を深めることができ目標を十分に達成できたと考える。

ベネズエラには多くの興味深い場所がある。世界遺産であるエンジェル・フォール、特産物であるコーヒー、カカオなど、まだまだ児童生徒に知らせたいものがたくさんある。今後は、学校として児童生徒に何を見せたいか、何を体験させたいか、そんな思いをもって校外学習を仕組んでいかないといけない。これまで以上に職員の現地理解や、現地調査を積み重ね、児童生徒の力となる活動の工夫が必要であると考えている。

5. おわりに

本校では、少人数であることをプラスの材料として授業の工夫を行い、個に応じた指導や授業の工夫を行っている。少人数で行うからこそ培われる力というものもあり、教職員が前向きな姿勢で取り組み、その結果として、児童生徒は互いに支え合い協力して、いろいろな行事を通して心も体も大きく育ってきている。

また、ベネズエラにあるということをも最大限に生かし、現地の自然、歴史、文化等に触れ、ベネズエラにいるからこそできる学習を行える。そうした機会はこれまで本校に赴任された方の積み重ねがあつてのことである。

以前に比べると非常に治安が悪化してきているベネズエラである。教員の思いとは裏腹に校外学習の実施が難しいのも現実である。しかし、中でもしっかりと事前調査を行い、大使館等のバックアップを受けて児童生徒にとって思い出、財産となる校外学習を計画、実施できたことは大きな成果であると考えます。

上記のように、児童生徒数が少なく治安に不安が残るといった課題はあるが、校外学習は単調になりがちなカラカスの生活にあって、児童生徒にとって大きな楽しみになっており、活動を通して教室内では体験できないようなことを体験させる場として大きな役割を担うと考える。今回の調査・研究の成果が今後の教育活動の一助となることを期待する。

残念ながら平成25年度末頃から、急速に治安が悪化するに伴い臨時休校や午前授業で打ち切るなど、教育の場に混乱が出てきた。その対応として、プランB（治安悪化にともないスクールバスでの通学ができない際、教員が集合可能な児童宅に訪問し、授業を行う。）が実施されるなど、今後の先行きも不安なまま今年度の終わりを迎えた。

これらのことにより、学習活動の自粛が迫られたり、積み重ねてきた伝統やデータが失われたりしてしまうことは、悲しいことであるとともに、子どもの貴重な学習機会を奪うことにもなりかねない。児童生徒の減少と、ベネズエラ国内の治安の変化に最大限の注意を測りながら、児童生徒のための教育が行えるように取り組んでいくことを願う。